Evelyn Waugh の空想社会 (1)

宮　井　　敏

すでに一定の名声を得ている英米の現代作家の中で，Evelyn Waugh ほど今なおさまざまに評価の分かれる作家は少ないだろう．その，かなり徹底した Catholicism を背景にした党派性や階級意識過剰の snobism に対して強く反撥する人も数多いし，又一方ではそうした partisanship や snobism のゆえにこそ彼の作風を愛してやまぬという人々があるわけである．前者は emotional な反撥であり，後者は趣味性の問題であると片付けてしまえばそれまでの事であるが，そうした主として taste の level での好悪の立場をこえてなお，彼の作家としての detachment の欠落を鋭く指摘する人々の意見と，その作品の sophisticate された文学的香気を高く評価する人々の態度の間には大きなくいちがいがあり，議論がかみ合わないでおわっているようにおもわれる．この事は一つには彼の作品を分析する上での大きな視点の一つになっている風刺ということの定義のむづかしさがからんでいよう．あきらかに風刺的意図をもたない *Helena* (1950)のような歴史小説や，*Brideshead Revisited* (1945) のような serious な小説，或いはそれほど satirical な要素の多くない自伝的な *Sword of Honour* (1965)三部作などは別として，彼が satirist であるといわれるに足る程に書きのこしたあまたの風刺小説をめぐる評価の多様性ということは，実は風刺とは何ぞやという一番大事な筈の物差しを，批評家お互いがそれぞれに見せ合わないで，勝手気儘に作品を測ってみては長いの短かいのと声高に言合って来た結果のような気がするのである．だからこそ James F. Carens のように *The Satiric Art of Evelyn Waugh*(1966)を書

くにあたって，Preface の中に "A Note on Satire" なる一小節を掲げて，自分の考える風刺とは如何なるものであるかをまず明らかにしてかかる必要があったわけであろう．

もとより風刺の定義は簡単なことではなく，又問題を風刺文学の中の風刺小説にしぼって考えてみても，ある作品全体に風刺的意図があきらかであるもの以外にも，ある作中人物のみが風刺的である場合，作中に風刺が散見する場合，部分的にある章節のみが風刺である場合などが考えられるわけであるが，ここでは Waugh の作品中，従来あまり紹介されていない，純粋に空想の所産である空想社会を舞台にした作品二つをえらんで，彼の風刺の意図が奈辺にあるかを考え，あわせて，それによってそもそも風刺とは何かという問題の解明の一助としてみたい．

Waugh は1945年夏，Spain, Salamanca で行なわれた16世紀のカトリックの作曲家 Tomás Luis de Victoria（イタリア名，Tomaso Lodovico da Vittoria）（*circa* 1540–1611, or 1613）の没後300年記念式典に列席して第二次大戦直後のヨーロッパ世界の混乱にじかに触れる機会をもったのであるが，この時の印象[1]と，戦時中イギリスの軍事使節団の一員として，当時ドイツ，イタリアの侵略軍と交戦中であった Jugoslavia のパルティザンと接触すべく同国に赴いた折の経験とから，東ヨーロッパの仮空の国 Neutralia を舞台にした *Scott-King's Modern Europe*（1947）を書くことになったものである．この作品ははじめ *Cosmopolitan* 誌に *A Sojourn in Neutralia* という題名で発表されたのち，1947年に上記のように改題してあらためて Book Form で出版されたもので，Granchester という public school（英国最古のpublic school, Winchester College を連想させる）の古典語の教師 Scott-King 先生が夏の休暇に Bellorius[2] という16世紀のラテン詩人の300年記念式典に招かれてバルカン半島にある仮空の独裁国家 Neutralia（"neutral" を連想させる）を訪れ，新興国家にあり勝ちな非能率な官僚機構の中で翻弄され，散々な目にあって命からがら帰

国するという話をえがいたものである．

自然科学系や社会科学系の科目に押され気味の人文科学系教養科目のそれも古典語の先生である Scott-King が年来ひそかに Bellorius という 16 世紀のラテン詩人の一種の Utopia をうたった長詩を研究していたのが誰の目にとまったものか，今や新興の独裁政権が率いる詩人の祖国 Neutralia から Bellorius 300年記念式典への招待状がとどく．煩瑣な手続ののち，何やら怪し気な各国の代表と一緒に飛行機に搭乗して首都 Bellacita へ到着すると，歓迎委員会のお膳立てはすっかり出来上がっているのであるが何しろ体養文化省主催の開会式，ベラシタ大学主催のレセプション，ベラシタ市主催のワイン・パーティー，ベロリウス式典委主催の晩餐会等々と30分刻みの行事続きに先生はすっかり参ってしまう．翌日一行は詩人の故郷 Simona へと向うが，どうやらこの詩人について本当に知っているのは先生とシモナ大学の Bogdan Antonic 博士だけである事がわかって来る．おまけに歓迎委の幹事 Arturo Fe によれば，祝われるのは Bellorius でも誰でもよかったので，ともかく Neutralia として何か国際的文化行事をやる事が先にきまって，適当な人物もないままに Bellorius をかつぎ出すことになったのだという．散々の首尾で詩人の除幕式をすませた先生はやっとの思いで首都へ戻ってみると世話役の Arturo Fe が失脚してしまっており，一行は散り散りばらばらになり，手持ちの金はどんどん減ってゆきイギリス大使館には見放なされ，文字通り途方に暮れているところへ国際的なルポライターの Miss Bombaum と出くわし，彼女の世話で地下ルートの手で命からがら帰英する．学校に戻ってみると新学期を迎えて先生の古典語クラスに登録する生徒はさらに減っており，校長から歴史か何か他の科目も担当願えんだろうかと云われて先生はいわゆる現代的な教育を生徒達に施す気は全然ないのだと云う．校長の「そりゃしかし，少々近視眼的じゃないですか」．という言葉に答えて Scott-King 先生は云うのだった．「どういたしまして．私のやり方こそが一番遠視的なんですよ」．

さて作者のこの作品における狙いが Neutralia という新興国家における官僚機構の混乱と非能率をとり上げ，そうした制度のもとで翻弄されている非力な個人の姿を通してそれを satirize しようというにある事はあきらかであるがその satirization にあたっての基本的な態度として，この国の bureaucracy なり red-tapism なりを真正面から攻撃するというのではなくて，一歩退いた形で，つまり defeatistic な tone でこれを取り上げようというにある．そのために，近頃あまり景気のよくないいわば無名の public school の中年の古典語の教師を scapegoat に仕立て上げた事はまさに必然の成行きであり，近代化を背景にした巨大な管理社会と，無力で前近代的な中年男というシャープな contrast においてこれは成功しているといえよう．つまり，今もし「一切の悪は書類にある．すべての書類を焼き払え」と叫んだ Michael Bakunin のように，管理社会の機構悪を徹底的にあばくという強い怒りが作者の motive であるならば，これは古典語の古びた先生などではなくて，何者であれ，もっと個性の強い自己主張的な若者が必ずや必要だっただろうからである．云うなればこの作品は従って，怒りの詩ではなくて嘆きの歌であったわけである．

又そうした defeatism を背景にした satirization であるからこそ“汚職常なき薄給の官僚群”が支えているこの国のとんちんかんなてんやわんやぶりを伝える作者の筆は冴えているといえる．たとえば，Neutralia の誇りであり又一連の行事の対象でもある詩人 Bellorius が何も知らない各国代表の手にかかると実在の人物 Belisarius (*circa* 505–65)（東ローマ帝国の将軍．ユスティニアヌス帝に仕え，ペルシアの侵入を撃退した）と完全に混同されてしまったり，世界体操女教師大会に出席する筈の北欧の女丈夫がこの一行にずっとまぎれ込んでいたり，世話役の Arturo Fe がベラシタ大学の教授で，地方裁判所の判事で，弁護士で，歴史評論の編集長で，休養文化省の高官で，啓蒙旅行局の顧問で，ラジオのニュース解説者であったり，肝腎かなめの Bellorius の像が，一時は景気がよかったあ

る商人が石屋に註文したまま破産してしまって引取り手のなかった何やらわけのわからぬ神像であったりするわけである．また，飛行機の搭乗手続をするのに，女店員監督のような，女家庭教師のような，助産婦のような感じのグラウンド・ステュワデスが，

"Have your embarkation papers, medical cards, customs clearance slips, currency control vouchers, passports, tickets, identity dockets, travel orders, emigration certificates, baggage checks and security sheets ready for inspection at the barrier please."

と叫ぶところがあるし，この国の税金の重さを嘆いて，

"…… a series of baffling taxes—30 per cent for luxury tax, 2 per cent for stamp duty, 30 per cent for service, 5 per cent for the winter relief fund, 12 per cent for thoes mutilated in the revolution, 4 per cent municipal dues, 2 per cent federal tax, 8 per cent for living accommodation in excess of minimum requirements····"

とならべたてるところが出て来る．Scott-King 先生の泊まった Hotel の名は政変のあるたびごとに，the Royal, the Reform, the October Revolution, the Empire, the President Coolidge, the Duchess of Windsor と変っていて，この国の政権が時には親英，時には親米の政策をとったり，政体そのものが革命政権にとって代られたり，王政復古があったりした事などを如実に示している．大体この Neutralia という国は作者によれば，Bellorius の死後200年の間に，およそ一つの国家ならばおこりうるであろうすべてのあしき政治現象にことごとく遭遇しており，それは，

"Dynastic wars, foreign invasion, disputed successions, revolting colonies, endemic syphilis, impoverished soil, masonic intrigues, revolutions, restorations, cabals, juntas, pronunciamentos, liberations, constitutions, coups d'état, dictatorships, assassinations, agrarian reforms, popular elections, foreign interventions, repudation of loans, inflations of

currency, trades unions, massacres, arson, atheism, secret societies…"
といったわけなのである．だからこうした無秩序な混乱ぶりを誇張して，それも被害者の側から腰を引いた形で satirize する段になると，まさにそれは Waugh の独断場であり，このようなてんやわんやぶりを次々とならべ立てる事による効果はまことに絶大なものがあり，何ともいえないおかしみとくすぐりを誘うのである．Scott-King 先生が最後にこの Neutralia から脱出しようとしてもぐり込んだ地下ルートに集まる人々にしてもそうである．

"…… a detachment of Slovene royalists, a few Algerian nationals, the remnants of a Syrian anarchist association, ten patient Turkish prostitutes, four French Pétanist millionaires, a few Bulgarian terrorists, a half-dozen former Gestapo men, an Italian air-marshal and his men, a Hungarian ballet, some Portuguese Trotskyites."

ところで，この作品の舞台になっている Neutralia と云う国は，地中海に臨むバルカン半島の一角にある仮空の国という事になっており，次節でとり上げる *Love among the Ruins* という作品はまた近似の未来におけるイギリスという事になっている．そこで，こうした空間や時間を移して想像の中でつくり上げる空想社会の条件を一まず検討してみる事にしよう．

およそ空想社会をえがき出す文学には，古来現実の時間空間を超越した地点に理想郷をつくり上げてみせる utopia と，その裏返しの形として pessimistic な態度で恐怖の未来社会を描いて見せる inverted utopia 即ち dystopia とがあるわけであるが，これを，空想社会を成立せしめている時間と空間という次元から眺めてみると，(1)ある特定の現実の社会において時間のみを移しかえて仮空の社会をつくる場合と，(2)共時的に登場人物は行動しはするが，現実とははなれた空間を舞台にする場合とがあるわけである．(1)の場合はいわば Time Machine が前進後退するように，一定時

の未来及至過去に時間を移動させる手法をとるものであり，Mark Twain の *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* (1889) がたとえば後者であり，次節にのべる Waugh 自身の *Love among the Ruins : A Romance of the Near Future* (1953) が前者である．また時間的には現代社会とほぼ時を同じくし乍ら，空間のみを想像にまかせる(2)の場合は，不明確な地球上の一点，主としてどこかの孤島に舞台を据えるものと，こまかくは明らかにしないが地球上の現実のある地域に地点をもとめるものとがある．前者は "Robinsonade" と一括して呼ばれるように，Daniel Defoe の *Robinson Crusoe* (1719)にはじまり，近くは William Golding の *Lord of the Flies* (1954) に到る一連のグループがそれであり，現実の社会に住んでいる主人公が何らかの理由によって地球上のある隔絶した地点へ赴き，一定期間を経たのち再び帰国するという形をとるものである．また，地球上の現実の或る地域に中心をおく今一つのやり方では，大体において，(a)，東ヨーロッパか，(b)，アフリカ及びその周辺か，(c)，中南米の三つのどれかの地域内に仮空の国を設定する事が多いようである．(a)の場合には Anthony Powell の *Venusberg* (new ed. 1955)が，国名は明らかにしないが "a country on the Baltic" を舞台としているし，(b)の場合には Waugh 自身の *Black Mischief* (1952)が東アフリカ海岸の北から順に Kismayu, Malindi, Tanga および Dar-es-Salam をむすぶ線を底辺とした三角形のほぼ頂点あたり（現実には Amirantes Islands か Aldabra Islands のどれかの島という事になろうが）のどこかにある Azania 帝国での物語ということになっている．(c)の場合には Herbert Read の唯一の小説，*The Green Child* (1935)の中に出て来る "the Republic of Roncador" が南米 Buenos Aires から馬で20日行程のところにある国として描かれており，David Ely の *The Tour* (1967) の舞台は国名は明記されていないが "Banana Country" というあだ名の南米のどこかの国という事になっているし，また John Kenneth Galbraith

の珍らしい小説 *The Triumph* (1968) の中の "Puerto de Los Santos" は中米の West Indies のどれかの島である，といったわけなのである．

さて，こうして時間や空間を移すことによって仮空の国を設定してみせる目的は，いうまでもなく一つには現実の社会のもつさまざまな制約をはなれて，白紙の上に一つの状況を構築して，それによって人間社会のより普遍的な問題を提起すること，および，それを媒体として，それぞれの作者の立脚点である現実社会の問題を綜合的に批判することにあるのである．だから，ある特定の問題のみを提起するのならば，そのために仮空の社会をわざわざ構築してみせる必要は必ずしもないわけであって，例えばアメリカにおける黒人大統領出現の可能性を描いた Irving Wallace の *The Man* (1964) の場合，アメリカにおける coup d'état の可能性を如実に示した Fletcher Knebel & Charles W. Bailey II の *Seven Days in May* (1962) の場合，および米ソ間での ICBM の誤爆による核戦争の勃発を現実のものとしてとり扱った Eugene Burdick & Harvey Wheeler jr. の *Fail-Safe* (1962) の場合など，いづれも現実の社会の上に特定の仮空状況を想定して，それによってそれぞれ個有の問題を提起しようとしているわけである．

ところで，この普遍的な状況の現出と，現実社会に対する批判とは実際の文学作品の中ではきわめて相対的に併存しているものである．これが文学以外の場での発想法としてならば，完全に無制約な白紙の上に理論的にありうる普遍状況のみを構築してみせる事は可能なわけである．Karl Marx が「資本論」第一章商品の中で，「経済学者はロビンソン物語を愛好するから，まず島上のロビンソンに出てもらう事にしよう」とのべているように，何人かの経済学者は Daniel Defoe の手法にならって，ある隔絶した空間を設定して，そこで行なわれる，現実とは無関係な理論的経済現象を究明しようとしている．John Heinrich von Thünen (1783–1850) の「孤立国」(*Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und*

National ökonomie, 1826) や，Robert Owen (1771-1858) の「平行四辺形」(*Report to the Country of Lanark*, 1821) などがそれである．けれども文学の世界では，たとえば Thomas More の *Utopia* (1516) が，船乗り Hythloday の口を通して理想国 Utopia の風俗，制度について語らせても，それは結局はヨーロッパ社会の，特殊的には十六世紀イギリスの社会批判になってしまうように，現実批判の側面を含まない utopia 物語はまずあり得ないわけである．いいうることは utopia 文学のように理想郷を提示しようと，dystopia 文学のように nightmare を描き出そうと，理論的には可能な，現実の制約条件の少ない社会像をかかげて（それがネガを使ってか，ポジのままでかは別として），それによってより普遍性のある問題を中心として現実批判を強く行なおうというやり方と，現実社会を直接に批判せんがために，時間か空間かのいづれかの次元の置き換えによって，或程度の制約の下に近似の社会像を出し，それとの対比において，主としてある特定の社会現象を風刺しようという行き方とがあるわけである．これを要するに論理的帰結としてのひとつの社会のパターンを先に提示してそれによって一般的な批判を行なう方法と，特定の批判を強力に行なわんがために，現実の社会を部分的につくり変えるやり方とがある，という事になろうか．いづれにしてもより直接的で鋭い風刺が期待出来るのは当然後者の場合という事になろう．

ただ問題となるのは，あとの場合，いかに出入り自由の空想社会といえども，やはり読者の側の想像力の伸長の限度をふまえて，どれほど自然にある特定の想像空間へ彼等をつれてゆき，かつ連れ戻るか，という点であり，かりにそれが「絵空事」である事が承知の上にもせよ，突然の不自然さを感じさせないでしばらくは仮想の国に悠然と遊ばせるところに作者の力量のほどが示されるわけである．さきに空間を移すやり方のばあい，所在不明の孤島を舞台とするものは別として，この地球上では3つの地域しか普通使われる事がないとのべたのは，これら東ヨーロッパ，アフリカ，

中南米それぞれの地域には同じような小国が分立しており，又かなり頻繁に政治状況が変るために，この三つの地域でならばある一つの国があり，そしてそこに何らかの政治的事件がおこったと仮定しても，読者の側で或いはそういう事もあろうかと，さほど強い異和感もなしに受け取ってくれるからであろう．読者がある鮮明なイメージを抱いている特定の個性的な国を空想社会の下敷きに使うことは従って，恣意的な空想のひろがりを阻害し，想像ののびやかさに制肘が加えられるのみならず，さきにのべた空想社会構築の目的にもそぐはない事になるわけである．

ところで，Waugh は第二次大戦直後という時点で，あるイギリス人が東ヨーロッパのどこかにある仮空の国へ赴き，しばらく滞在ののち帰国するという物語を書いたわけであるが，以上のべた空想社会の諸条件に照らしてみて，どのような事が考えられるであろうか．作者は Footnote に "The Republic of Neutralia is imaginary, and composite and represents no existing state." と断わっているが，冒頭にのべた作者自身の第二次大戦中の経歴と，作中で前記の Dr. Bogdan Antonic が Scott-King の問いに答えて，"I am a Croat … and then put under the Serbs." とのべているところからしても，又その少しあとで，"It was a great thing for a Croat to enter our diplomatic service. All the appointment went to Serbs." と云っているのをみても，バルカン半島でクロアチア人とセルビア人の軋轢のあるのは Jugoslavia しかないわけだから，Neutralia は自らユーゴスラビアという事になり，読者の想像も純粋に空想の所産であるどこか仮空の国での出来事とは取らないで，現実のユーゴスラビアを下敷とした受け取り方になってしまうものとおもわれる．そうなると，さきにのべたようにユーゴスラビアというかなり複雑な成り立ちをしているあまり平凡でない国のイメージがきわめて鮮明であるために，作者が目的とする一般的な問題の提起がすべて特殊ユーゴ的な事象としてしか受け取

られなくなるのではなかろうか.

大体このユーゴという国は，キリル文字とラテン文字という二つの文字を用い，セルビア語，クロアチア語，マケドニア語，スロベニア語という四つの言葉が話され，正教，カトリック，回教，という三つの宗教をもつ人民共和国なのであるが，背後には六世紀に溯る長く複雑な歴史をもち，東西二大潮流の接点となっている国なのである．つまり，東ローマ帝国と西ローマ帝国，ひいてはビザンティン文化とカトリック文化の接触点であり，ヨーロッパとオリエントの境界線としては，キリスト教と回教の相接する場所でもあり，オットーマンとハプスブルグの激突する地点であり，そして今は共産主義と資本主義の相互滲透するところとなっているのである．だから，ユーゴスラビア建国（1929）以後に限ってみても，その歴史は一寸世界に類のない程はげしく複雑なものがあり，およそ大ていの国ならば遭遇するであろうすべての政治現象をことごとく経験しつくした感があるのであるが，そこで思い出されるのはさきにのべた Neutralia における王位簒奪，武力革命，農地改革，官廷革命，暗殺，通貨膨張，武力干渉，王政復古，人民解放，憲法改正、植民地反乱，大量虐殺等々の事件が，はじめは羅列のリズムとたたみかけの効果でたしかに笑いを誘いはするのであるが，その Neutralia が外ならぬ Jugoslavia である事に思い到ると，ここにかかげた事件は，少くとも二十世紀に入ってからのユーゴでは，実際にあったなまなましい出来事なのであるから，意図的誇張と想像力の刺激という caricaturization の効果は期待出来なくなり，下手をするとこうした表現は単に「政情不安の国からのリアルなレポート」という事になりかねないわけである．同じ新興国の "confusion" をとり上げても *Black Mischief* の場合，背後に歴史をもたず，投影する文明をもたない純粋に仮空の土人国 Azania における国をあげての性急な近代化のもたらすとんちんかんな混乱，狼狽，興奮が，描写にかなり残酷さがあるにもせよ，見事に生きているのは，その滑稽さのもたらす笑いが，現実社会との連想に

阻害されず，無目的で方向性をもたないためであろう．「風刺を阻害するものは専制主義と地方感情である」と云うが，たしかに風刺は urbanize された sophistication が理解の前提となる反面，sophisticate されない地方感情の持ち主の大真面目な行動はそれ自身風刺家の絶好の餌食ともなるわけである．

さて作者のはじめの意図はこの独裁政権下の新興国の bureaucracy や red-tapism のもたらす非能率や混乱，およびそうした制度の中でふり回される個人の非力，といったものを笑いを通じて風刺しようというにあったとおもわれるが，その点に関する限り，現実の Jugoslavia の状況もさる事ながら，作中の Neutralia の政治状況は必ずしもこうした目的に favourable であったとはいいがたいものがある．この Neutralia では eye-patch をつけ松葉杖をついた市長とか，街頭のアジ演説で声を潰してしまった文化大臣とか，かっての政変のすさまじさを偲ばせるものが散見しはするが，ともかく Marshal と呼ばれる独裁者のもと，今は一応の安定を得ているわけである．ところで風刺がもっとも活躍するのは，安定してはいるが，正統なものが定着して久しく，次第に形骸化してしまっている時，新旧の価値体系のずれがひどくなって，古い社会体制が崩壊しはじめて，新らしい秩序が権威を中心に再建されるまでの過渡期などであるが，少くとも革命のさなかと革命の直後には無用の代物なのである．Neutralia 国内における混乱は，激しい変動期をのり越えて，新らしい秩序の再建に向っている際の摸索から生れて来たものであり，倦怠と虚無の生みだしたものではない．また，混乱と新秩序との緊張関係は無責任な第三者の cynical な笑いを誘う事の少ない筈のものであろう．又その建設へのエネルギーは人が皮肉なえみを浮べて矮少化する事を拒否するはげしい何物かを含んでもいよう．要するに風刺家は革命の前夜にこそ発言の場を与えられても，革命が進行して終了し，再び次の革命の条件がととのって来るまでは沈黙を強いられる人物なのではなかろうか．

たしかに Waugh の無目的的な "confusion" を残酷に笑いとばすという芸当は初期の作品以来得意として来たところであろうが，この作品に限って云えば，その "confusion" のよって来たるところの場の設定が必ずしも適当でなかったわけである．従って，官僚体制のもたらす混乱や無秩序の描写からさらにすすんで，そうした機構の間における「責任の蒸発」という重要な指摘がそのために強くは浮かび上がって来ず，作者の逃避的な態度から出る "およそすべての近代的なるもの" に対する心情的反撥だけしか印象に残らない[③]結果になっているのである．結局，作者が第二次大戦直後に訪れた Spain, Salamanca で実感した古い官僚体制の非能率や混乱ぶりを新興国 Jugoslavia にかぶせて空想社会を構築しようとした無理が最後まで尾を引いたものではなかろうか．

けれども作者のこうした官僚体制の生み出す矛盾に対する反撥はかなり根強いものがあり，ひいてはそれに支えられる福祉国家の没個性的劃一性と，個人の尊厳の喪失に対する怒りへと発展してゆくのであるが，次節において福祉国家そのものをとり上げた未来社会の物語 *Love among the Ruins* を検討してみる事にしたい．　（未完）

註

① "...I write it three years ago. After I got back from Spain..." (*The Writer Observed*, by Harvey Breit)

② 本文中に示すごとく，Jugoslavia ではキリル文字とラテン文字が使用されているが，本書執筆の1946年頃，死後300年となるラテン詩人はユーゴの文学史には見当らない。強いていえば Gundulic Dzivo (1589—1638) が上げられるが，"Bellorius" と云う名は Belsarius との連想から得られた，モデルのない架空の人名であろう。

③ *Interlocutor*: The discussion about short and long views at the end of the book gave a depth to the satire—it was funny and it was moving.
Mr. Waugh: (skeptically) Oh you liked that? I'm sure there's a good theme in it. But I didn't do it...
(Harvey Breit, *op. cit.*)